

## 出血傾向

英語名： Bleeding tendency

同義語： 出血



### A . 患者の皆様へ

ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

何らかの原因で血が止まらない、あるいは出血しやすくなる「出血傾向」は、医薬品によって引き起こされる場合もあります。何らかのお薬を服用していて、次のような症状が見られた場合には、放置せずに、ただちに医師・薬剤師に連絡してください。

「手足に点状出血」、「あおあざがでやすい」、「皮下出血」、「鼻血」、「過多月経」、「歯ぐきの出血」

### 1 . 出血傾向とは？

何らかの原因で止血に異常が生じたり、線溶系（止血の最終過程で血管内の中にできた血の固まりを溶かす仕組み）が著しく活性化され

たことにより、血が止まらない、あるいは出血しやすくなる状態を言います。

最初に、「あおあざができる」、「鼻血」、「歯ぐきの出血」などの症状が出現して気づくことが多いのですが、出血傾向が放置され、急激に大量出血があるとショック（血圧低下）状態になり、危険な状態になる例もみられます。

出血が進行すると次第に貧血状態になり、さらに慢性的な出血の場合は鉄欠乏性貧血をきたします。また、頭蓋内出血、呼吸器系出血、消化器系出血、泌尿器系出血など出血部位により様々な症状が出現します（薬剤性の血小板減少でも出血傾向をきたしますので、血小板減少症のマニュアルも参照してください）。

出血の原因としては、血管の障害、血小板数の低下、血小板の機能障害、凝固機能障害、著しい線溶系の亢進などが考えられます。なお、出血部位や医薬品により、出血が起こる仕組みは異なります。

## 2．早期発見と早期対応のポイント

ショック、貧血、心不全、意識障害などの全身性の症状が出現してからでは遅いので、「手足に点状出血」、「あおあざができやすい」、「皮下出血」、「鼻血」、「過多月経」、「歯ぐきの出血」などの症状により早期に出血傾向に気づくことが重要です。以上のような症状がみられた場合で、医薬品を服用している場合には、放置せずに、ただちに医師、薬剤師に連絡して下さい。

また、ワルファリンは、投与量の調節をしながら使用していますが、効き過ぎにより、出血傾向を起こすことがあります。この場合は、勝手に薬の量を減らしたり中止したりせず、主治医に相談してください。

ワルファリンを服用されている場合は、PT ( INR ) ( プロトロンビン時間の国際標準化比 ) を参考にしてください。ワルファリンとある種の医薬品 ( 解熱消炎鎮痛薬<sup>げねつしょうえんちんつうやく</sup>や抗生剤などいくつかあります ) の飲み合わせにより、ワルファリンの作用が強くあらわれ、出血しやすくなることもあります。

ワルファリンよりも出血の副作用が少ない抗凝固薬として、直接経口抗凝固薬 ( DOAC ) も 4 種類 ( ダビガトラン、リバーロキサバン、エドキサバン、アピキサバン ) ありますが、出血の副作用がないわけではありません。

### ( 参考 ) 臓器症状

- ( 1 ) 頭蓋内出血には、脳出血、出血性脳梗塞、硬膜下血腫、くも膜下出血、硬膜外血腫、脳室内出血などがあり、重症の場合は死亡する恐れや、片麻痺、言語障害、てんかんなどの後遺症が残る恐れがあります。吐き気、めまい、頭痛、項部硬直、意識障害、麻痺、視力障害、感覚障害などに気づいたら医療機関を受診して、CT や MRI などの画像診断を受けましょう。
- ( 2 ) 消化器系出血には、食道・胃・十二指腸・小腸・大腸・腹腔内出血などがあり、吐血、下血、血便、腹痛、腹膨満感などの症状が出現し、大量出血の場合はショックとなり、中等度の場合は貧血の原因となります。大量下血や吐血の前に、食欲不振、腹痛、吐き気、腹部膨満感などの症状が現れることがあります。また、黒色便 ( タール便 ) がみられることもあります。早めに便の潜血テストを受けましょう。
- ( 3 ) 泌尿器系出血には、腎・尿管・膀胱・尿道などからの出血があり、症状としては頻尿、排尿時痛、下腹部痛、尿潜血、血尿などがあります。生命にまで影響は及びませんが、重症化すると腎不全になることもあります。早めに検尿検査を受けましょう。
- ( 4 ) 眼部出血では、初期には目がかすむなどの視力障害が出現します。ひどい場合は失明の危険性があり、早めに眼科を受信しましょう。

( 5 ) 呼吸器系出血には、咽頭、気管、気管支、肺胞などからの出血があり、血痰、喀血などの症状により診断されますが、吐血との鑑別が必要な場合もあります。喀血などの前に咳、呼吸困難などが出現することがあります。早めに喀痰検査や胸部のレントゲンやCT検査を受けましょう。



医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の「医療用医薬品 情報検索」から確認することができます。

<https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>

独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく公的制度として、医薬品を適正に使用したにもかかわらず発生した副作用により入院治療が必要な程度の疾病等の健康被害について、医療費、医療手当、障害年金、遺族年金などの救済給付が行われる医薬品副作用被害救済制度があります。

(お問い合わせ先)

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 救済制度相談窓口

[https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai\\_camp/index.html](https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai_camp/index.html)

電話：0120 - 149 - 931 (フリーダイヤル) [月～金] 9時～17時 (祝日・年末年始を除く)